

# Thomas James の *Jesuits Downefall* における ジェズイット批判について

高橋 正平

## 序

*The Jesuits Downefall, Threatned Against them by the Secular Priests for their wicked lives, accursed manners, Hereticall doctrine, and more then Machiavillian Policie* (Oxford) という本が1612年に出版された。<sup>1)</sup> Thomas James なる著者によるこの本はタイトルにもあるようにジェズイットの「邪悪な生活」「忌まわしい方法」「異端的教義」「マキアヴェリ以上の狡猾」を100の命題に分類・紹介し、ジェズイットの「没落」を予想している書である。それを読むとジェズイットがどのような人たちで、どのような見解を持ち、当時どのようなことを行っていたかが容易に理解できる。この書は、「没落」とあるようにジェズイットに対する批判書である。ジェズイットは、1534年に「貞潔」「清貧」「エルサレム巡礼」をモットーに結成され、ロヨラの *The Spiritual Exercise* 『靈操』を基に厳しい戒律を信者に課し、1540年には教皇パウルス三世から正式に認可された教団である。ジェズイットは「より大なる神の栄光のために」神への奉仕と人類救済を目指すことをその最終目標とし、それはキリスト教の普及というかたちで全世界で実践されたきたことは歴史が雄弁に物語っている。ところが時代が経るにつれて、ジェズイットの評判が著しく低下してくる。反ジェズイットの空気が台頭してくるのである。本来のジェズイットの敬虔な宗教心はその姿を消し、逆に悪の代名詞としてジェズイットが登場してくる。『ジェズイットの没落』が書かれた1612年頃は反ジェズイットの空気が最も険悪であった時期でもあった。この頃の反ジェズイット書を見ればいかにジェズイットがイギリスのみならず大陸でも嫌悪の対象であったかが容易に理解できる。『ジェズイットの没落』もそのような反ジェズイットの書の一環をなすものであるが、我々はその内容の余りの露骨な敵意にみちたジェズイット批判に驚かざるをえない。小論では、『ジェズイットの没落』を手がかりに17世紀初頭におけるジェズイットの実体の解明を試みたい。

## 1. “Atheist Jesuits”

『ジェズイットの没落』のなかで特に注目すべきは本来は敬虔な宗教心を兼ね備えた教団であるべきジェズイットが、逆に宗教とは無関係な、宗教の利用に奔走した無神論者の集団であるという指摘である。たとえば命題1ではジェズイットはキリストではなく悪魔から生まれていると述べ、ジェズイットがいかに真の宗教からは遠い存在であるか、そしてイエズス会の詐欺的集団性が批判されている。

...this Order [the Society of Jesus] is the refuse of Religion, and therefore worthely the least Religious Order in holie church. A most impostural corporation, that have cleane

forsaken and forfeited the spirit of the Catholicke Church. <sup>(32)</sup>

宗教を捨て、カトリック教会の精神を失ったジェズイットは反キリストの先駆けで、ジェズイットのおかげで反キリストは現世に登場するのをためらったほどである。ジェズイットは反キリスト以上にこの世を悪で満たし、新しいピューリタニズムの主なる考案者でもあり、すべてを偽善的熱意を口実として行う。

*Antichrist* doubted to be come by reason of them [the Jesuits]: for they are forerunners of *Antichrist*, & Arch-inventors of new Puritanisme, worse than ever was yet heard of, and all this is done under pretence of Pharisaiicall zeale. <sup>(33)</sup>

宗教を隠れ蓑にして社会を混乱に陥れようとしているという批判はジェズイットに対する批判に中でも頻出する批判である。無神論者ジェズイットや彼らの偽善的態度はジェズイットを論ずる際のお決まりの批判であった。『ジェズイットの没落』では他にもジェズイットと無神論や偽善が取り上げられている。命題23では、宗教はジェズイットによって完全に「破壊」されたと言う。命題30では「偽善者」が扱われているが、ジェズイットは宗教を偽善的に誇示したり自慢することにより、人々をジェズイットにおびき寄せる。

These men [Jesuits] make an *hypocritical* shew & vaine vaunt of Religion, a chiefe meanes of drawing others to them. <sup>(41)</sup>

また偽善的な熱意の口実の下、「偽宗教人」たるジェズイットは有徳の男女を欺く。

For under pretence of their *Pharisaiicall zeale* & lives, *these mock-religious persons*, have deluded many vertuous men & women; <sup>(45)</sup>

命題31も同様にジェズイットの偽善性を指摘する。パリサイ人にも等しいジェズイットは信心を装い、多くの者を教団に誘い込む。他の者よりも信心深い振りをし、罪を犯した者達との飲食を避け、そのために高い向上心、ピューリタンの信心さに明知を得、それを「禁欲」「服従」「心身の完璧さ」の誇示によって傲慢にも見せびらかす。

These *prowde Pharisees* by *pretended pietie* allure multitudes; for they pretende themselves to bee *more holy* than the rest, and that therefore in respect of the sins that rained amongst others, they would neither eate nor drinke with them, and such a blind conceit, have these illuminates of high aspires, of their *Puritanian holynesse*, that they make arrogant vaunts therof, by *ostentation* of mortification, obedience, perfection of state... <sup>(46)</sup>

そして神からの栄誉に対して、“watchings” “praiers” “fastings” が永遠に神のものであることを祈願するが、「高慢なパリサイ人」たるジェズイットが手にする徳は「貪欲」

「強要」「欺き」「裏切り」「反逆」である。命題33は偽善者としてのジェズイットを扱う。ジェズイットは、決して真実に、誠実に、直接的に物事を言わない。ジェズイットには「真なる言葉」はなく、有名な虚偽があるだけで、「虚偽の心」がジェズイットのすべてにある。そしてジェズイットの基盤は「虚偽」であり「徳」ではない。

Their [Jesuits'] ground where they take, be it even against the holy Sea, is *dolus* not *virtus*, their speech indefinite, peremptorie, and *dissembling*, and therefore it is hard to convince them of any errours in faith, by reason of their sly *dissembling*, equivocation, sophistication, winding and doubling;<sup>(7)</sup>

虚偽を常套手段としたジェズイットを最もよく表すものに「二枚舌」(Equivocation)がある。これは「虚偽、欺き、ごまかし、捏造術」<sup>(8)</sup>で、具体的にはどのようなものかと言えば、「返答と真意が別」で、「狡猾な、偽りの話し方」<sup>(9)</sup>である。ジェズイットの「二枚舌」により、誰もが彼らの真意を知ることが不可能になる。ジェズイットは多くの「言い逃れ」があり、真実を語るに際しては良心をもつことはない。<sup>(10)</sup>「二枚舌」により、ジェズイットは、一般のカトリック教徒を惑わしているが、「二枚舌」の行き着くところは「無神論」である。ジェズイットの「二枚舌」は、自らを守るための巧妙な方便であるが、イギリス国民からは「虚偽」と見なされていた。言うなればジェズイットは「うそつき」で、重大な事態に直面すると体よく「二枚舌」を駆使し、危機的状況をうまく逃れるのである。上記の「答えは一方」で「意味するところは別」で言えば、逃げてきたジェズイットを追っかけてきた警察官に「左に逃げた」と言うが、実際は「右」を意味するような虚偽なのである。これはジェズイットがよく使った方便で、シェークスピアも『マクベス』で使用している。二枚舌はジェズイットにのみ許された「虚偽」なのである。

命題63ではジェズイットの異端の見解が述べられる。彼らは虚偽、間違い、矛盾を積み重ね、あるジェズイットは「キリスト教徒でない者がローマ教皇であるかもしれない」という「恥ずべき、不信心な、異教的」な主張をする。

Out of the Jesuits doctrine, certainly therein is nothing else but fallacie upon fallacie, error upon error, one contradiction encountring an other, all nothing.<sup>(11)</sup>

そしてローマ教皇がキリストの代理であると信じることは信仰問題ではないとさえ言う。彼らはローマ教会と相容れないことを教えているので、スペインではペラギウス派や異端者として、フランスでは詐欺師として告発されている程である。命題68ではジェズイットの教義は無神論への開かれた道であり、無神論者でないジェズイットはいないとさえ言いきっている。ジェズイットの無神論的な基本的信条は自らを称揚し、自らに与しない者を破滅させることでもある。<sup>(12)</sup>

敬虔なカトリック教徒の振りをしながら実は宗教を隠れ蓑にして人々を欺き、社会を混乱に陥れていれるのがジェズイットの正体である。「無神論者」ジェズイットはこの時代におけるジェズイット批判のなかでは頻出するが、『ジェズイットの没落』の著者も当時の典型的なジェズイット批判を繰り返している。

## 2. “wicked lives” と “accursed manners”

無神論者としてのジェズイット観ではジェズイットの偽善的な態度へ批判が浴びせられるが、それと関連してジェズイットの「邪悪な生活」と「忌まわしい作法」が徹底的に非難される。ジェズイットは、カトリック教会内での過激な改革を試み、そのためには文字通り手段を選ばない集団である。彼らの不道德な生活は偽善者としてのジェズイットとも関連するが、命題1ではジェズイットと悪魔との関連について触れている。それによればジェズイットはイエスではなく悪魔に属する。彼らは「神の息子」ではなく、宗教のごみで、教団の名には少しも値せず、カトリック教会の精神を失った詐欺的団体である。

but this Order is the refuse of Religion, and therefore worthely the least Religious Order in holie church. A most impostural corporation, that have cleane forsaken and forfeited the spirit of the Catholicke Church. <sup>133</sup>

ジェズイットと悪魔との関連は、反キリストの先駆者としてのジェズイットとも関連してくる。反キリストはジェズイットのためにこの世に現れることを躊躇したほどである。ジェズイットは、偽善的な熱意を口実にしてかつて聞かれたこともなかった新しいピューリタニズムの大考案者でもある。<sup>134</sup>ジェズイットの悪辣振りを指摘する命題4は、ジェズイットはトルコ人よりも悪辣であることを指摘する。

They [Jesuits] are blasphemous wretches, an impious brood, Progenie of vipers, to use our Saviours words against them, the offals of the old Scribes and Pharisees, who hath taught them to eschew *iram venturam*? they use to *turkize* over men in a shameful manner, nay, it were better to live under the *Turke* for the securitie of their soules, than under the *Jesuites* government, or rather captivitie. <sup>135</sup>

ジェズイットは冒瀆的な悪漢で、不敬な種類の輩、まむしの子孫である。彼らは恥ずべき方法で人々を虐げ、魂の安全のためにはジェズイットの支配下にあるよりもトルコ人の支配下にあるほうがよい、とさえ言い切っている。

命題6は、生活、作法におけるジェズイット邪悪さに触れる。ジェズイットは、俗人を墮落させ、悪の限りを尽くし、神と人間の法を曲解し、自然の道に反している。

...because they [Jesuits] pervert all both God and mans lawes, and runne against the course of nature and kind. <sup>136</sup>

更には悪事にかけてはサタン的な傲慢、不信心な行為においては他に類を見ないジェズイット、悪事にかけてはジェズイットと比較すると他の者はすべて下劣で卑しく見なされる。彼らの「不誠実な、無慈悲な、不敬な、聖職者にふさわしくない慣行、言語に絶する高慢、野心、ねたみ、強要、残酷さ、ジェズイットが嫌悪する人達への耐え難い中傷的な

言葉」が列挙される。<sup>17)</sup> これらはジェズイットの真の姿を描き、イエズス会が徳の高い人達に対して悪魔と手を組んでいることは恥ではないかとさえ言う。命題7以下ではジェズイットの以上の性格が詳細に述べられるが、例えば命題7ではジェズイットの野心について触れ、ジェズイットはサタンの野心から生まれており、聖職者を支配下に置こうとする野心と狡猾に言及する。

The wicked *Jesuits* are of *Luciferian ambition, most ambitious and cunning*, in seeking to beare rule over the Clergie...<sup>18)</sup>

そしてジェズイットは、野心によってあらゆる教団以上に全ヨーロッパを苦しめている。ジェズイットの野心の他に、彼らの虚栄心、ねたみ、悪意、生意気さ、厚顔等についても言及される。例えば、虚栄心については「これらの良き神父達は彼ら自身の賞賛と名誉を切望するが、それはあたかも彼らがトレードの威張り散らす人、ごろつき、自慢屋の集団であるかのようである」と記述されている。<sup>19)</sup> 命題12ではジェズイットの「残酷性」について以下のように述べられている。

They [*Jesuits*] are *merciless, hard, and cruell harted* to their afflicted brethren; for instead of *meekenesse, mercy and compassion*, they have put on a *sterne, harsh and cruell hardnes*, void of all *pittie, mildnes* or *remorse*.<sup>20)</sup>

苦しむ同胞に対する無慈悲な、過酷な、冷酷な嫌悪、及び憐憫、柔和、後悔を欠くジェズイットの過酷さが容赦なく描かれる。本来であれば敬虔なキリスト教徒として「憐憫、柔和、後悔」を他の者に示し、神の道を歩むべきであるが、ジェズイットにはそれが無い。むしろキリスト教徒とは相反する人間として社会を混乱に陥れ、人々を意のままに操ろうとしている。ジェズイットの敵対者への徹底した嫌悪は、たとえば、低地三国では多くの優秀な人々を惨めな最後に至らしめ、死後ですら彼らを非難するほど冷酷であった言う。

敵対者の非難者としてのジェズイットは命題20でも指摘される。ジェズイットは、敵対者へ「鋭い歯」や「感情を傷つける言葉」を用い、敵対者の評判を引き裂き、彼らを傷つける。たとえジェズイットが人を苦しめて殺しても、それを他人に転嫁する。彼らは自らの利益のために“*Atheall orders*”と“*Machiavillian maxims*”を守り、彼ら及び彼らの計画に反対する者を徹底的に中傷し、蔑視し、圧服する。命題90では、ジェズイットは優秀な人々を惨めな最後に至らしめ、絶望に陥れ、死後ですら非難程の徹底振りが述べられる。あるいは教団を去り、別の教団に入会する者には不正な非難を浴びせ、当人は元々はジェズイットからは拒絶されたと虚偽の情報を広めさえする<sup>21)</sup>。ジェズイットの攻撃の対象は単なる一般人にとどまらず、教皇、王、君主にまで及ぶ。ジェズイットに同調しないものはジェズイットの反対者と見なされ、有徳者にもいかなる尊敬にも値しないのである。ジェズイットに異を唱える者を徹底的に中傷、攻撃するのはジェズイットの最もジェズイット的な悪徳である。

Thus wee may perceave, *Detraction* to be the most *Jesuiticall* vice of all others, And the

*Jesuits*, to be the most malicious, traitorous, and irreligious *calumniators*, that ever lived on earth, unworthy that ever the earth should bear them, and intolerable indignitie to the whole Church of God, that ever such wicked members should live unpunished in her, as they doe.<sup>23</sup>

ジェズイットがこの世に生存したなかで「最も悪意のある、反逆的な、宗教と無関係な中傷家」であるという指摘はジェズイットの性格を容赦なく読者に示している。

ジェズイットの「忌まわしい性格」に、ジェズイットは他のいかなる者より頭がいいとの自負がある。彼らには、“Divelish spirits, of a Luciferian spirit”と優越性についてのうぬぼれがあり、いかなるものも彼らなしにはうまく成されない、と思っている。ジェズイットは現世のことはすべて彼ら次第であると思ひ、彼らにより行われなければ聖なる、カトリック教的な、健全なことは何もなく、ミサも正しく挙行されないと考える。そして彼らは、誰よりも神と親しいと考えている。

And they [Jesuits] will bee called new *Apostles*, *Illuminates*, and extraordinary *Rabbies*, that have more neere familiaritie & acquaintance with God, than any other,...<sup>24</sup>

神と最も親しい関係にあるジェズイットは、それゆえ、行為、言葉、考えにおいて決して誤りを犯すことはありえない。彼らは、立法者とすら考えている。

They [the Jesuits] say themselves that their *Societie* cannot erre, in any act, word, or thought, such Lords, lawlesse Sirs, and Legifers they take themselves to be;<sup>25</sup>

誤りを犯すことがありえないジェズイット教団は、教団が宗教総会よりも完璧で、教団会長の不可謬性についても論ずる。他の教団や一般大衆への優越性を自負するジェズイット教団は、裏を返せば自己中心的な、自己陶酔的な教団である。自分以外に優れた人物はいないとの信念のもとで、ジェズイットは数々の悪を犯し、社会に混乱を引き起こし、人々を不安に陥れる。実はそれがジェズイットの狙いで、社会的な混乱、人々の不安に乗じて、ジェズイットは社会を掌握し、人々の心に入り込み、彼らを教団に引きずり込むのである。これがジェズイットの巧妙なやり方である。ジェズイットはうぬぼれ輩の集団であり、彼らはそのうぬぼれに乗じて一般人を手玉にとり、社会を混乱に陥れ、挙げ句の果てはジェズイット国家建設に奔走するだけである。彼らのうぬぼれは自己賛美に終始し、彼らと与しない者を破滅へと追いやることに熱意を燃やすのである。

「狡猾さ」もジェズイットの性格の特徴の一つである。それは、意図的に意見の相違を引き起こすことである。命題19によれば、ジェズイットは「論争の創始者」で「あらゆる騒動の煽動者」である。イギリスにおけるすべての聖職者と社会的不和はイエズス会の神父達に起因する。彼らはイギリス国内ばかりでなく国外においても論争を引き起こしている張本人で、彼らの楽しみは「内紛と革新」以外にはない。それはなぜか。

because with their *Zizaniaes of faction*, they make boot & havocke of Catholickes estates;

getting more by *discord* than otherwise, and therefore it is no marvell if in private families, they *separate* brethren one from an other, and the husband from the wife, inflaming them with rancour and envie, one against an other.<sup>25</sup>

ジェズイットは内紛により結局カトリック教会を混乱に陥れ、彼らの思い通りにカトリック教会を操り、ひいては彼ら自身の利益を画策する。兄弟や夫婦を離反させ、憎しみとねたみで彼らを扇ぎたてる。これはマキアヴェリ的な「分割支配」で、ジェズイットのよく知られた見解であるとも言う。

『ジェズイットの没落』では、ジェズイットの「邪悪な生活」「忌まわしい方法」「異端的教義」「マキアヴェリ以上の狡猾」がジェズイットの特長として述べられており、読者は当時ジェズイットがいかなる人物であったかが容易に推察できる。Thomas James なる著者は、相当な個人的な嫌悪感をジェズイットに対して抱いていた人物のようであるが、James が『ジェズイットの没落』で述べているジェズイット像は決して James 特有の見解ではない。James の前後にジェズイット批判書が続出するが、それらはすべて James が述べていることと類似している。「悪の権化」としてのジェズイット、「マキアヴェリ以上のジェズイット」、「王殺し論者」としてのジェズイット、これらは16世紀から17世紀にかけて書かれた反ジェズイット書のおきまりのテーマであった。これらの問題については Mario Praz が *The Flaming Heart* で既に取り上げているが、<sup>26</sup> いずれにせよ『ジェズイットの没落』での執拗なジェズイット批判のなかで、James はジェズイットなどという集団は単なるうそで身を固めたごろつき集団で、宗教人の名には全く値しない集団であることを赤裸々に世間の人々に示したかったのである。それは、また、ジェズイットが堂々とカトリック教会内で勢力を得、巨大な狂信的集団と化し、世界に暗躍していた事実をも読者に示しているのである。ジェズイットは、彼らが行ったすべてが非難されるべきではなく、ただ、彼らは本来とどまるところにとどまらず、政治の世界にまで手を広げ、宗教を政治の手段としたことが彼らの大きな欠点であったと言わざるをえない。結局、彼らは偽宗教人としてレッテルを貼られ、まさに目的のためには悪をすら犯さざるをえない集団なのである。目的のためには平気で悪をも行うジェズイットの姿勢の延長にあるのが政治への介入である。『ジェズイットの没落』は、ジェズイットの「邪悪な生活」「忌まわしい方法」「異端的教義」「マキアヴェリ以上の狡猾」を微に入り細にわたり暴露するが、悪漢としてのジェズイットの集大成が彼らの政治への介入であったことは疑いえない。陰險な、他人を平気で欺き、ジェズイット王国建設が彼らの最終目標であったことを考慮に入れば、ジェズイットが政治へ介入してきたことは何ら驚くには値しない。その姿勢が、また、ジェズイットの宗教的敬虔を世俗的政治へと変えているのである。Thomas James は、ジェズイットの政治を論じるときは必ずジェズイットをマキアヴェリと対比するが、マキアヴェリも政治と宗教・道徳を切り離し、専らいかにすれば国を安泰に維持できるかを論じていた。国の安泰維持のためには宗教すら利用されねばならなかった。マキアヴェリ政治家としてのジェズイットについて James は次のように言う。

...these *Politicke canvassers* or *Matchiavilian Polititians*, have so many *Matchiavilian* devices, as every plot and drift, seemeth to bee an infallible rule of falsehood, and a principle in

chiefe, whereby the *Jesuits* doe square their actions, as never a Prince in Christendome, nor any man living, can tell where to find, or how to trace or trust them.<sup>27</sup>

ジェズイットは、マキアヴェリ的戦略を弄し、虚偽という全く誤りのない規則と信念を彼らの行動指針とする。16世紀-17世紀におけるお決まりのマキアヴェリ像をジェズイットに適應するのであるが、しかし、ジェズイットはただマキアヴェリに匹敵するだけではない。ジェズイットは、歴史上の名だたる悪漢に教えを施すほど悪にかけてははるか雲の上の存在なのである。

For in all sacrilegious and *temporizing* platforms, *Atheall* plots of perdition, *Matchiavilian* or rather *Mahumetan-like* faction, Heathenish, tyrannical, *Sathanicall* and *Turkish government*, none goeth beyond the *Jesuits* at this day; and they are able to set *Aretin*, *Lucian*, *Matchiavel*, yea and *Don Lucifer* in a sort to schoole, as impossible for him by all the Art he hath, to besot men as they do.<sup>28</sup>

敬虔な宗教心を放棄したジェズイットは大衆に迎合する戦略を弄し、自らの利益を最優先する。無神論的に自らの敵対者を地獄に落とす計画をたて、マキアヴェリやマホマトを思わせる徒党を組み、一般民衆を支配するときは異教的、暴虐的、サタンの、トルコ的な支配を実効する。ジェズイットを凌駕するものはいない。戦略、利己的性格、専制的支配といったジェズイットの特徴がいかんなく述べられている一節である。James は更に言葉が続けて、ジェズイットはアレティーノ、ルキアノス、マキアヴェリ、サタンに教授すると言う。当時、批判のやり玉に挙げられた好色な詩を書いたアレティーノ、風刺文学のルキアノス、それにマキアヴェリ、そして悪の張本人たるサタン、これらすべての教師がジェズイットであるというのである。James は、ジェズイットがいかんにも悪にかけては手に負えない人物であるかを歴史上の名だたる悪人と比較させることにより、ジェズイットの悪漢振りを強調したかったのである。アレティーノ、ルキアノス、マキアヴェリ、サタンの存在を薄くさせるほどの悪人がジェズイットであるというわけである。

歴史上類を見ない悪漢であるジェズイットの最大の関心事は政治である。政治というよりジェズイット教団の権力・勢力増強のために各国の王に取り入り、王を利用して教団の拡大を狙うのである。ジェズイットの狙いはあくまでも教団の勢力拡大であり、最終的には一国の支配者を手玉にとり、教団の安泰を図る。権力にすり寄り、最後には権力者を思い通りに操作する。その手段が「王殺し」という一国の支配者には物騒極まる、戦々恐々たる理論であった。それは単なる理論に留まらず、彼らはそれを実践した。イギリスへのジェズイットの布教団には国家問題を扱うべきでないという明確な条文があったが、ジェズイットはイギリスのカトリック教徒のみならず国家にまで干渉していることを自負していた。彼らは教会や世俗的な君主の問題では「おせっかいなうるさい人間」であった<sup>29</sup>。ジェズイットの政治問題干渉理論によれば、と James は言う。

...according to their doctrine of *statizing*, they must be stirring, tampering, and *temporizing*, and *statizing* like martiall men, or common souldiers in the field of war, in all

temporal, mundane and stratagematically affairs;<sup>98</sup>

ジェズイットは、騒動を起こし、画策し、日和見的で、政治問題に干渉しなければならない。それは現世的な世俗的な戦略的な問題においてである。言うなればジェズイットは政治問題に関わり、社会に混乱を引き起こし、権力を掌握することに奔走する。政治への干渉はジェズイットにとって権力把握の序章にすぎない。裏を返せば、ジェズイットは本来専念すべき宗教は脇に追いやり、世俗的な問題に躍起となっているのである。ジェズイットが批判された理由の一つは、彼らが宗教的使命に燃え、カトリック教会に革命を起こそうとしていたその背後で、宗教人とは程遠い、俗人以上の俗物さを世間に示していたという事実である。彼らが真の敬虔な宗教心をもって、カトリック教会内の改革に専念していれば、James を初めとして他の人から非難を浴びせられることはなかった。彼らが尊敬の対象としてより嫌悪の対象として世間から見られていたことはこの時代の多くの反ジェズイット書が明確にしている。では、ジェズイットが権力の中核にいかにして接近していった方法は何であったのか。その一つはスパイである。ジェズイットはヨーロッパの王の宮廷にスパイを送り込むのである。スパイは王の秘密を発見し、それをローマに送るので、イギリスではなされることはすべてローマに筒抜けなのである。だから本来は勉強と黙想に時を過ごすべきジェズイットは各国からの情報を受け取ることに楽しみを見出すのである (p.21)。スパイを通して王の秘密を入手する他に、ジェズイットは君主の宮廷で貴族や紳士等と和解し、彼らの仕事を海外に広めるが、その際に報告書と共に珍しいことすべをも送る。それは宮廷内の出来事を必要以上に賞賛するジェズイットの巧妙な策略である。だから君主の周囲にはジェズイットのことを悪く言う者はいない。

...and there is no Prince in the world, but hath some *great* Lord or other about him, that wilbe ready to speake a good word for the *Jesuits*, in hope of a better time at their hands, at one time or other when kingdomes are at stake.<sup>99</sup>

国が危機に接したときにジェズイットの援助に依存しなければならない場合を考慮して、ジェズイットに好印象を与えておこうというのである。このような君主のジェズイットへのへつらいの態度をジェズイットは逆手に取り、王国を手玉に取るのであるが、君主はそのようなことは知るよしもない。君主ですらジェズイットを無視できなくなっているのである。

スパイの次にジェズイットは「賄賂」と「約束」により、権力に近づく。ジェズイットは、ある事業を企てる時 “broker” を利用する。ジェズイットは直接手を下さないで、ブローカーに事業が成功した暁の約束を与え、ブローカーに大きな期待感を与える。そして、海外からの侵略に対して警報を鳴らす。ジェズイットは、彼らの評判を汚すようなことに関しては、決して自ら手を下さない。第三者を使い、責任逃れを絶えず考えている。社会を混乱に陥れることをやりながら、彼らはいつも背後にいる。表舞台には姿を現さず、背後で事を操作する。そのような「ずる賢さ」がジェズイットにはある。賄賂に関して、それは「マキアヴェリの古い、陳腐な原理」である。

...it was an old stale principle of *Machiavell*, to packe and sack up sakes of mony to bring and binde mens tongues therewith, to preach and prate in court, country, and Pulpit, what they will have, to keepe themselves in.<sup>39</sup>

マキアヴェリが金で他人の口封じを実際行っているかは定かではないが、マキアヴェリ同様、ジェズイットは金で相手の口を封じ、宮廷や地方や説教壇で好きなことをしゃべり、自らを売り込むのである。ジェズイットは自らの存在を売り込むために人々を金で買収するのである。ジェズイットは、自分の思いのままにならないといかなる手段をも辞さず、まさに「目的のためには手段を選ばない」のである。ジェズイットは、また、他人の手紙を途中で横取りしたり<sup>38</sup>、言いなりにならない司祭の品性を傷つけたり、彼らに危害を加えたり<sup>39</sup>、更には司祭の権限を一時停止したりもする<sup>39</sup>。あるいはジェズイットは義捐金を本来の目的に使用せず、自分の懐に入れてしまうことも平気で行う。ジェズイットは、司祭や枢機卿のみならず君主をすら彼らに隷属させる。それはなぜか。ジェズイットは、君主的な支配体制を認めていないからである。ジェズイットは、王権は臣民から一時的に委譲されていると考え、王権が臣民を支配することを否定するのである。王と臣民との間には「契約」が存在し、王は臣民の意に添わない場合は王の交代もしくは殺害すら可能であると考え、だから王に対しては「驚くべき軽蔑」があり、王のやり方に中傷を浴びせる。ジェズイットは、王の存在を否定するのみならず、外国への侵略をも行い、王国を売却することも厭わない。イギリスを侵略する敵についてしか話したり書いたりしない。ジェズイットは、いたずらに人々に不安を煽り、その間にあわよくば国を奪ってしまうとう魂胆である。ジェズイットは、王や聖職者を処分・追放することに奔走し、一国を他人に売り渡すことも厭わない。このようなジェズイットは、王側からすれば反逆者である。ジェズイットは彼らの目的を果たすために策を弄し、もっともらしい説得を使い、人々を翻弄し、陰謀を図る。ジェズイットからは裏切り、反逆、陰謀しか生まれて来ず、イギリスにいるジェズイットで「不敬」「不信心」「裏切り」「反逆」「マキアヴェリの無神論」じみたところのないジェズイットは存在しない、とさえ James は言う。

For out of the Jesuits *doctrine*, certainly there is nothing else but *treacheries, treasons, and conspiracies*, and hence it must needs followe, that there is not a *Jesuit* in all *England*, but hath a smacke of impietie, irreligiositie, *treacherie, treason, and Machiavillian Atheisme*:<sup>66</sup> (p.31)

そしてイギリスに一人でもジェズイットがいれば、暴動、反逆、陰謀、内紛がある。それゆえ彼らの書には教会や国家に対して策略、憤激、陰謀が満ちあふれている。当時のジェズイット像が容赦なく描き出されているが、これらの特徴こそが一般的なジェズイットの実態を形成しているのである。ジェズイットから一般人が思い浮かべるイメージは、陰謀によって社会の転覆を謀る悪漢としてのジェズイットである。国家においては王の殺害を謀り、宗教においては教皇に取って代わろうとする野心を抱く。すきあらば何事にも手を出し、すべてを意のままに行わなければ気がすまない自己中心的集団、それがジェズイットである。そしてジェズイットに反対する者は王であろうが教皇であろうが、徹底的にこき

下ろし、極端な場合は王を殺害までする狂信的集団、それがジェズイットの正体である。しかし、このようなジェズイットに神は味方するのであろうか、と James は言う。

But how hath God favored these prevaricators, *Pharisees*, and *Conspirators* against God and their country, these massacring butcherlie buyers and sellers of their deare countrymens blood? <sup>67</sup>

ジェズイットはいわば神や国家に対するうそつき、パリサイ人にも匹敵する人物、陰謀家であり、同胞人を残虐にも売買する人である。一言で言えばジェズイットは神の道に反する人である。ならばそのような神の道に背く人々に神はいかにして手を貸すことがありえるのか。もし神がジェズイットに味方をすれば神は悪に加担し、悪を励行することになる。これは神が神であることを否定することを意味する。神の神たる所以は神が悪と対決し、この世から悪を除去することにある。なのに神が悪の張本人たるジェズイットを味方することがありえるのか。断じて「否」である。「ジェズイットのカティリナの呪文と陰謀は神の手によって正当化されず、祝福もされない」<sup>68</sup>と James はきっぱりと言う。神の否認、見放しは神の決別、離縁を意味する。ジェズイットは、国やカトリック教会を牛耳り、ジェズイット王国の建設に暗躍するが、しかし、それは神から見放された盲目的な暴挙にすぎず、彼らを待ち受けるのはただ「没落」だけである。James の『ジェズイットの没落』のタイトルの意味するところは、神の罰によるジェズイット自らの「没落」なのである。ところがジェズイットは、「没落」ではなく、「繁栄」を夢見るが、神から見放されたジェズイットに神の援助は期待できるはずはない。むしろ、神は悪を罰する。悪を罰する神がジェズイットを味方することは決してありえない。悪に加担するのは神でなく、悪魔である。キリスト教世界において悪魔が神に勝利することはありえない。悪魔は神から追放される運命にある。だから悪を行うジェズイットは、神から追放される。ただジェズイットはそれを知らないだけである。ジェズイットは全知全能ぶりを自負する自信過剰の人物であるが、一つだけ無知な点がある。それは彼らが神から見放されており、彼らはいずれは「没落」せざるをえないということを知っていないということである。

暴動、反逆、陰謀、策略家としてのジェズイットよりも王、教皇、枢機卿等殺人者としてのジェズイットが社会に及ぼした影響ははるかに大きかったし、そのイメージがジェズイットの悪名を一層高めることになった。命題61で James は、王、教皇、枢機卿殺害者としてのジェズイットに触れている。ジェズイットの「邪悪な生活」「忌まわしい方法」「異端的教義」「マキアヴェリ以上の狡猾」のなかで、James は王、教皇、枢機卿殺害者としてのジェズイットの凶暴性の実態を容赦なく描き出す。なぜジェズイットは、王、教皇、枢機卿を殺害するのか。王殺害に関してはすでに上記で触れたが、これはジェズイット特有の王と臣民との「契約説」によっている。ジェズイットの考えによれば、一つの共同体が先に存在し、その後に支配者がくる。共同体の構成員が共同体の長として一人の人物を選び、そのひとに彼らは権力を委譲する。支配者は彼らから権力を委託されているのであって、主体はあくまでも共同体の構成員にある。それゆえ、権力を委譲した人物が一般民衆の意に反する場合はその長を廃したり、極端な場合は殺害も認められるのである。しかし、ジェズイットの「王殺し」は誰でもが王を殺害できるというわけではなく、それは

王が「暴君」(tyrant)になったときのみ認められる行為である。だから James は次のように言うのである。

The *Jesuits* and their seditious faction, do broach & publish such a kinde of doctrine, that subjects are no longer bound to obey wicked Prince in their temporall Lawes and commandements, but till they be able by force of armes to resist them.<sup>439</sup>

臣民は世俗的な法や命令において「悪王」に従う必要はないという表現は正しい解釈である。また, "...they [Jesuits] seeke to *murder* wicked Princes and propose rewards to such as *kill tyrants*..."<sup>440</sup>とも言っているように, James はジェズイットの「王殺し」が「暴君殺し」であることを知っていた。ジェズイットは, この「王殺し」理論によりフランスのアンリ三世を殺害し, 王に反する書を書いたりしたが, それは地獄で企んだかのようにであるとも言う。いずれにせよジェズイットは, フランスでは様々な王を殺害し, イギリスでもジェズイットが「悪い目的」を企んでいる。だから彼らは「憎むべき, 忌まわしい人々」なのである。

For all which and many mo *traiterous practises*, the *Jesuits* are at this day an odious & detestable Generation.<sup>441</sup>

「王殺し」と関連するが, 13番目の命題で, ジェズイットは「殺人と大虐殺で有名である」と述べられている。

The only thing they [the Jesuits] long for, is to bring al a flore in fire and sword, according to their prowde, *Machiavillian*, and cruell designements, committing many secret *murders*, & open *Massacres*. And verily some breath of bloody garboyles and cruelties is threatned to all nations, by these *Assassinists*. For what are they all, say some that know them, but *massacring*, butcherlie, buyers and sellers of their deare country mens blood? The very *Canibals*, and *Anthropophagies*, shall rise up at the last daie, and condemn this barbarous and savage generation of *Belials* blood for this crime.<sup>442</sup>

ジェズイットの殺人や大虐殺はマキアヴェリの計画に従っている。そしてジェズイットの暗殺者があらゆる国の脅威となっている。悪魔の血からなる野蛮なジェズイットの虐殺には食人種ですらも太刀打ちできず, ただ彼らを強く非難するだけである。ジェズイットがただ策を弄して, 社会を混乱に陥れるだけならまだよかったが, それに留まらずジェズイットは彼らの計画を妨害したり, 「暴君」と見なされた王の殺害をも辞さない。「暴君」という定義も特に一定の基準があるわけではなく, ただジェズイットが「暴君」と認定すればその「暴君」は殺害の対象になりうる。ジェズイットの恣意的な決定によっていかなる王も「暴君」と認められる可能性は大いにある。ここに至ってジェズイットは各国の君主から脅威の的と見なされ, 殺人集団となってしまう。裏を返せば王や教皇や枢機卿を平気で殺害してまでジェズイットは彼らの目的を遂行するのである。「邪魔者」は有無を言わ

せず消すだけである。

ジェズイットの「王殺し」理論はジェズイットの「目新しさ」の一つである。ジェズイットが「目新しさ」をふんだんに考案していることは命題73で言及されているが、それによればジェズイットは流行には飽き、「革新」「目新しさ」「新しい名前」を求める。ジェズイットがいかにカトリック教会内の革新的教団で危険な存在であったかは他でも批判されている。ジェズイットは、“a Reformed Priest, right Puritan in all things” に他ならず、“manners and doctrine, pertaining to manners, government, and order of life” において全くピューリタンのであり、“Puritan Protestants” と区別して“Puritan Papists” と呼ぶほうがふさわしい。教団内の多くの「原則」と政治、権威、圧政、評判、反逆、陰謀、に関して「奇妙な策略」がジェズイットにはある。ジェズイットの目的のためには手段を選ばない狡猾さが指摘される。

And there are at the least a hundred principles, and odde tricks concerning government, authoritie, tyrannie, popularitie, treason, conspiracie,...<sup>43</sup>

おそらくジェズイットが社会一般に及ぼした悪影響の中で「王殺し」理論ほど衝撃を与えた影響はないだろう。このジェズイットの理論は、正確には「暴君殺し」であり、それはジェズイットの国家がいかにして生じるかという問題かに由来している。彼らの「国民」と「支配者」との間の契約により、社会は成立する考えの根底に王廃止論又は王殺し理論があるのである。ところが「暴君」殺しが歪曲されて、暴君に留まらず、いかなる王も殺害対象となった。王のみならず政治・宗教会の要人までもがジェズイットの気に入られなければ簡単に殺害される。これはすべて「ジェズイット王国」建設のためである。ジェズイットは教会及び世俗的目的のためにキリスト教界を手に入れようとする。彼らの目的は、イギリスを“a Japonian Monarchie” か “an Apish Island of Jesuits”<sup>44</sup> にすることだと James は言うが、「日本的君主国」とか「ジェズイットの住む猿の島」とは何を意味しているのかを理解するのはそれほど困難ではない。「日本的君主国」とは絶対的支配者による統治体制であろうし、「ジェズイットの住む猿の島」とは絶対的支配者に誰もが隷従するような一糸乱れぬ政治体制を意味しているのであろう。上からの命令により、すべてが意のままに操られる体制、自が己を抹殺してまでも教団のために命を投げ打つような軍隊的組織をジェズイットは作り、強固な一団となって世界制覇を狙うのである。しかしながら、ジェズイットは残念ながら一般大衆からは支持を得られない。むしろ彼らは憎悪の対象となる。狡猾な策略、残虐性がジェズイットを「没落」へと追いやる。ジェズイットの没落を予言し、彼らの没落を願う最終命題で、James はジェズイット主義が今や「たむし」から「壞疽」になってしまっているから、それは切り落とされねばならないと言う。なぜならば川の流れに対して堰きが作られなければ荒れ狂う流れが人々の正直と謙虚をばらばらにし、流れの勢いが多くの者を運び去ってしまうからである。だから今こそジェズイットに用心すべき時である、と James は言う。

It is high time to looke to them [the Jesuits], for they are become already incorrigible of any Prince, Prelate, or People, & therefore a heavy destruction, ruine and downfall is

likely to come unto their Societies:<sup>45</sup>

ジェズイットは、君主や高位聖職者や人々からは手に負えない者となっているので「激しい破壊」「破滅」「没落」が教団に来そうである。そしてすべての人は、「扇動的な、テンプル騎士団的な、ジェズイットの党派を引き倒すことを援助すべきであり、ジェズイットをキリスト教国から追放すべきである。」ジェズイットは、宗教団としてはいかなる人からも支持を得ていない。彼らが得るものとは言えただ憎悪だけである。ジェズイットは、「野心」と「高慢」と「扇動的党派心」をもってキリスト教会をかき回しているだけである。Jamesは、激しい敵意をもってジェズイットを痛烈に批判し、彼らの「没落」を予言し、願うのである。ちょうどこれから半世紀後にジェズイットに匹敵するピューリタンがイギリスの歴史の舞台に本格的に登場するが、彼らも、また、実は「野心」と「高慢」と「扇動的党派心」を持っていた。ピューリタンは一時的にせよ革命に成功し、王を排除した。ジェズイットの場合、彼らはあれほどの団結力を誇りながら、ただ人々からは反感を買うだけで、結局一国を彼らの支配の下に置くことはできなかった。ただ彼らの伝道精神は歴史に名を残し続け、それは現在にまで続いていることを考えれば、17世紀初頭の一連のジェズイットの行動は本来のジェズイットを忘れた一部の者の逸脱した行為であったのかもしれない。いずれにせよ、Jamesが描いたジェズイットの数々の姿は当時としては紛れもないジェズイットの姿であった。『ジェズイットの没落』がジェズイットの実像をいかに暴露したという点からすれば、著者の個人的なジェズイットへの嫌悪感を否定はできないが、『ジェズイットの没落』はジェズイットに関する貴重な姿を我々に提示している書と言え。ジェズイットの真の姿を描き出すことによって人々の関心をジェズイットに向けさせ、ジェズイットを歴史の表舞台から追放しようとする作者Jamesの意気込みが全編から伝わってくる。『ジェズイットの没落』が書かれた1612年頃は反ジェズイットの空気が非常に高まった時期であったが、<sup>46</sup>『ジェズイットの没落』はジェズイットの考えや行動をその豊富な実例によって示したという点においては他の反ジェズイット書を圧倒する書となっている。

## 終わりに

『ジェズイットの没落』では、ジェズイットは度々“Machiavelli”と対比され、あるいは“Machiavellian”と呼ばれている。西欧社会で悪の代弁者として見なされていたマキアヴェリに匹敵しうるほどの悪をジェズイットが犯していたからであった。政治の世界のみならず文学の世界でもマキアヴェリは悪の張本人として扱われ、批判される。実際のマキアヴェリとは関係のない歪曲されたマキアヴェリ像が人気を博するに至った経緯はMario Prazによって明らかにされている。<sup>47</sup>ジェズイットは、マキアヴェリの目的達成のための宗教利用、宗教と道徳との分離を特に批判したが、ジェズイットも自らの野心を実現するために宗教を悪用し、非道徳振りを至るところで発揮し、一般社会にとっては嫌悪の対象であった。ジェズイットは、マキアヴェリ同様手段を選ばず、カトリック教会の変革及び社会のジェズイット化を企んでいたのである。その最も注目すべき理論は王権への民権の優位説いたことであった。それは民衆が王を選び、民衆の意に沿わない場合は王の解任又は殺害も可能であるという西洋の諸君主を震撼させた理論であった。

ジェズイットは、また、イギリス社会を混乱に陥れていた。特にロバート・パースンズ (Robert Parsons) を先頭にジェズイットはイギリスのカトリック教化を企み、彼らは当局から危険人物として追及され、イギリスと大陸を行き来することになる。ジェズイットがイギリスでも大陸でも脅威の的となっていた頃、1602年、カトリック教徒のウィリアム・ワトソン (William Watson) は *A Decacordon of Ten Quodlibeticall Questions Concerning Religion and State*『宗教と政治に関する十項目の微妙な論議から成る質問のデカコードン』を出版した。<sup>98</sup> この書は穏健なカトリック教徒であるワトソンが同じカトリック教徒ジェズイットを激しく批判・攻撃したものである。そのなかでワトソンも、ジェズイットを批判する際にしばしば“Machiavelli”または“Machiavellian”といった語句を使用する。そして何よりも驚くべきことは、ワトソンから10年後に出版された『ジェズイットの没落』はその内容のほとんどをワトソンの書から得ているということである。『ジェズイットの没落』の傍注はほとんど全ページにわたり、ワトソンの *A Decacordon of Ten Quodlibeticall Questions Concerning Religion and State* で占められている。ワトソンの大書の縮刷版的な書が『ジェズイットの没落』である、と言ってもいいだろう。著者の Thomas James なる人物については *DNB* にも記載がなく、彼がどのような人物であったかは全くわからない。ただ言えることは彼がジェズイットに対しては執拗なまでの個人的な嫌悪感を抱いていることである。『ジェズイットの没落』全編にわたる執拗なジェズイット攻撃は単なる攻撃にとどまらず、ジェズイットへの怨念のような感情が感じられるのである。

『ジェズイットの没落』から25年後の1637年に *El Machiavelismo degollado* (『マキアヴェリ主義斬首』) という書が出版された。<sup>99</sup> この書はスペイン・ジェズイットのクラウディオ・クレメンティ (Claudio Clemente) による反マキアヴェリ書で、著者がジェズイットであるという事実を考慮に入れると極めて興味深い。なぜならば、クレメンティが『マキアヴェリ主義斬首』を出版する頃までには、マキアヴェリ的なジェズイットが様々な面から批判・攻撃されていたからである。とりわけスペイン・ジェズイットからのマキアヴェリへの批判は激しく、宗教を国家・政治の道具としていることへの批判は特に厳しかった。例えばリバディネイラ (Pedro de Ribadeneira) の *Tratado de la Religion* (1595年) はその代表的なマキアヴェリ批判書である。<sup>100</sup> リバディネイラがそこで繰り返し論じていたことはマキアヴェリが宗教を道徳から切り離し、悪の勧めを行っているということであった。リバディネイラの後のポッセヴィーノもまたしかりであった。<sup>101</sup> しかしながら興味深いことはそのジェズイットはマキアヴェリを批判する一方で、彼らは宗教・政治に革新を引き起こそうとしたためイギリスのみならずヨーロッパ諸国でも批判的になっていったことである。クレメンティはジェズイットへの批判が高まるなか、大胆にもマキアヴェリを攻撃の対象として取り上げ、マキアヴェリの理論を「斬首」する。そしてマキアヴェリに従わなかった君主は繁栄を極めていたことを繰り返し論じている。それまでのジェズイットへの批判を知っている我々は、ジェズイットのマキアヴェリ攻撃はそのままジェズイット批判に跳ね返ってくることを知るのである。つまり、ジェズイットは一方でマキアヴェリを批判しながら、他方でマキアヴェリを凌駕する数々の悪を犯していたのである。その悪の数々を列挙したのが、『ジェズイットの没落』の著者 Thomas James であった。彼の書は、既に言及したように William Watson の書からの抜粋であった。Watson の書は大著であるために一般読者には読みづらい。James の方は一般読者向きで、ジェズイットの「邪悪な

生活」「忌まわしい方法」「異端的教義」「マキアヴェリ以上の狡猾」をコンパクトに列挙している。その点では James の『ジェズイットの没落』は Watson の書よりはるかに読みやすい。Watson の書の出版10後にその縮刷版が出版された理由は、James なる人物がジェズイットの余りの傲慢さ振りに業を煮やした結果であったろう。ジェズイット設立当初の純真な宗教心を忘れたジェズイットへの怒りの告発であったであろう。いずれにせよ、読者はジェズイットのありのままの姿を知る絶好のチャンスを得ることになった。その意味では『ジェズイットの没落』はジェズイットに対し大きな不利益をもたらしたに違いない。

## 注

- (1) テキストは British Library 所蔵の Thomas James: *The Jesuits Downefall, Threatned Against them by the Secular Priests for their wicked lives, accursed manners, Hereticall doctrine, and more then Machiavillian Policie* (Oxford, 1612) を使用した。なお必要に応じて、i を j に、u を v に変えたが、表記はテキスト通りにした。
- (2) James, p. 1.
- (3) James, p. 1.
- (4) James, p. 14.
- (5) James, p. 14.
- (6) James, pp. 14-5.
- (7) James, p. 17.
- (8) James, p. 17.
- (9) James, p. 18.
- (10) James, p.18.
- (11) James, p. 33.
- (12) James, Proposition, 21.
- (13) James, p. 1.
- (14) James, p. 1.
- (15) James, p. 2.
- (16) James, p. 3.
- (17) James, pp. 3-4.
- (18) James, p. 4.
- (19) James, p. 4.
- (20) James, p. 8.
- (21) James, p. 45.
- (22) James, p. 10.
- (23) James, p. 10.
- (24) James, p. 37.
- (25) James, p. 8.
- (26) Mario Praz: *The Flaming Heart* (New York: The Norton Library, 1973), p. 131 や pp. 132-3 を参照。また、Thomas H. Clancy, S.J.: *Papist Pamphleteers* (Chicago: Loyola University Press, 1964), pp. 166-7 をも参照。
- (27) James, p. 20.

- (28) James, p. 20.
- (29) James, pp. 20-21. Praz も, マキアヴェリとジェズイットに頻繁に共通して使用された形容詞は 'polypragmatic' 即ち 'meddlesome' であったと言っている。(Praz, p. 133)
- (30) James, p. 21.
- (31) James, p. 22.
- (32) James, pp. 22-4.
- (33) James, Proposition 42.
- (34) James, Proposition 43.
- (35) James, Propositions 44-45.
- (36) James, p. 31.
- (37) James, p. 32.
- (38) James, p. 32.
- (39) James, p. 32.
- (40) James, p. 32.
- (41) James, p. 32.
- (42) James, p. 6.
- (43) James, p. 2.
- (44) James, p. 45.
- (45) James, p. 45.
- (46) 1612年頃までに書かれた反ジェズイット書には以下があり, それらはすべてジェズイットの悪の数々に言及している。特に, ジェズイットの「王殺し」や 'equivocation' や 'tyranny' は彼らへの攻撃の中核をなしている。(William Watson: *A Sparing Discoverie of our English Jesuits* [London, 1601], I. H.: *The Unmasking of the Politique Atheist* [London, 1602], Etienne Pasquier: *The Jesuites Catechisme* [London, 1602], Thomas Morton: *An Exact Discoverie of Romish Doctrines in the Case of Conspiracie and Rebellion* [London, 1605], Thomas Morton: *A Full Satisfaction concerning a Double Romish Iniquitie* [London, 1606], R. Pricket: *The Jesuits Miracles, or new Popish Wonders* [London, 1607], W. Crashaw: *The Jesuites Gospel* [London, 1610])
- (47) Praz, pp. 90-145参照。
- (48) William Watson: *A Decacordon of Ten Quodlibeticall Questions Concerning Religion and State* (London, 1612). これは James がジェズイットの情報のほとんどを得た大著で, ジェズイットの正体を暴露した書である。
- (49) Claude Clemente: *El Machiavelismo degollado por la Christiana sabiduria de España y Austria. Discurso Christiano-Politico A la Catholica Magestad de Philipo IV. Rey de las Españas* [Madrid, 1637]. 本書については『新潟大学言語文化研究』第九号 (2003年12月), pp.165-191で論じた。
- (50) Pedro de Ribadeneira の *Tratado de la Religion* (Madrid, 1595) については, 科学研究補助金 (基盤研究(C)(2) (平成11年3月) で論じた。
- (51) Antonio Possevino については, 科学研究補助金 (基盤研究(C)(2) (平成11年3月) で論じた。